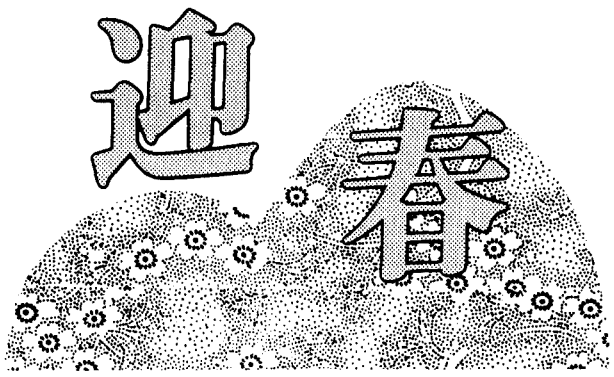
1959年1月31日第3種郵便物認可

週刊 うたごえ新聞

1/1・8 (1990年) NO. 1286

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
うたごえ新聞社
〒169 東京都新宿区大久保2—16—36
☎ 03(209)0638 FAX 03(200)0105
振替口座 東京2-5631 毎週月曜日発行
1部120円・税4円(〒26円)・月480円・税15円(〒120円)



若者の風を起こそう

東淀川「仲間がいっぱいコンサート」付属青年サークル(大阪)

動くこと駿馬のごとく機敏。サークルの顔を、と告げるや全員が一目散に近くの寺に集合、ハイ、ポーズ。決まってるね、この顔、顔、顔。

〝楽しく 笑顔で〟がモットー。何よりも弾ける若さの東淀川「仲間がいっぱいコンサート」付属青年サークル、三十五人。

嵐の中の「まつり」フィーバー

昨年夏、若者の交流の場にしないか、とよびかけられた東淀川「仲間がいっぱいコンサート」で、それならひとつ、と腰をあげ、まずはとにかく集まった十二、三人で、きたがわてつうたう「まつり」の歌とダンスで練習を始めた。

練習場もなかなかない、そうなりゃあだれの許可もいらないと、東淀川の土手で。うたって踊って、後は花火大会と一杯飲む会にしようと計画。ところがその日、大阪に台風到来。どしゃぶりの雨をバックに高速道路の高架下で夜半まで「まつり」フィーバー。このパワーでみんなのエンジン始動。コンサート当日には三十人の若者が集合。そして地域の合唱発表会、大阪の合唱発表会、日本のうたごえ祭典へとアクセルは踏まれた。

6分か8分か

大阪の合唱発表会からは演奏時間は六分と規定。ここからがサークルを変える第二弾「時間気にせずうたってきた今までの時間は八分。これやったら〝日うた〟出られへん。僕ら祭典に出たかったんですわ。なにせ、仕事や用がはいってて祭典の日しか出られんというメンバーもいて。なんとかせなあかん。しかしみんなが思いきりうたえるんはやっぱ今までの八分や。

六分か八分か、その中で、ものすご論議したんですわ。僕らが今までうたってきたんは何やったんやろって…。その中でみんなの中にうたう想い、意味がふつふつと湧いてきたんですわ、あらためて…」

とリーダーの近友徳次さん。僕らがうたうのは祭典に出るためやない、日々うたう魅力こそ大事や、歌だけやない、歌を通して交わす想いや、よっし! もうええ、思いきりうたおう! 八分でいくぞ! この論議はメンバーの中にサークルへの礎を築かせていった。

「そしたら、最後までストップウオッチとにらめっこしていたメンバーが、できたあ、これやったらいけるでぇ」

と六分の演奏が完成。この高揚の中で全国祭典一週間前の十一月十九日、サークルとして正式に発足。

熱いおもい体験したい!

とにかく若者見つけたら声かける、誘う、連れて来る。

「ここに来たら楽しい、と必ず実感させる自信あり」と言う彼ら。フリーアルバイター、縛られるの嫌い、仲間でワイワイなんて、という若者の、世に言う声に彼らは言う「それは本心やない。本当に熱い想いを体験したいと心の底ではみんな思ってる。みんなと一緒に自分を燃焼させられたらそれはもう、最高に楽しいに決まってる」と。

八六年日本のうたごえ祭典(愛知)で「まつり」を演奏し注目を集めた大阪の盲学校と海の子学園池島寮、近友さんはそこの「寮母」。あの時うたごえと出会い、闘っている人々、国労のおかあさんたちを知った。彼は言う

「がんばろうとする時、歌が生まれる。歌の後にあるもの、それをみんなで感じ、燃えて、地域をひっぱっていくようなサークルにしたい」

東淀川に、全国に、若者の風よおこれ! 三輪純永記者

撮影・内野敦

◇新春インタビューはこの人、神崎 愛さん 6・7面
◆村野守美さん新連載マンガ、今号からスタート 3面
◇映画「遠い夜明け」作曲者 ジョナス・グワングワ氏に聞く 4面
◆今年こそ勝利の春を!—日立武蔵・田中秀幸さん 11面
◇「広島の女」上演委員会を訪ねて 5面
◆日本のうたごえ祭典 今年は兵庫で開催 12面

ふめんだい

一九八〇年代が幕をおろし、いよいよ九〇年代を迎えた。

まさに、内外の情勢の激動の中で。

☆ ★ ☆

それにしても、自由と民主主義をもとめる東欧の変化、そのテンポの速さに驚くばかりである。

ポーランド十年、東ドイツ十週間、チェコ十日といわれ、歴史が動く時のダイナミズムを感じる。

☆ ★ ☆

南米チリでは、一九七三年の軍事クーデターで「歴史は彼等を裁くであろう」と最後の言葉を残したアジェンデ大統領、その死から十六年、独裁から民主主義への新たな勝利の時代へ。

☆ ★ ☆

また、参院選での与野党逆転と参議院での消費税廃止法案の可決。

ここにも戦後かちとった自由と民主主義を守り発展させてきた国民の力をみる

☆ ★ ☆

うたごえもいまだかつて経験したことのない年二回の大祭典を大きく成功させた。

四十周年祭典は、その時代の節目にふさわしく、京都での祭典は、九〇年代への新たなページを開いた。

☆ ★ ☆

今年の祭典は、神戸で開催。

時代をきりひらく声を詩(うた)にしてうたいひろげ、一万人のワールドホールをいっぱいにして素敵な音楽会をむかえよう。

(志)